

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	酒井 勇也
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目			
<p style="text-align: center;">20 世紀後半の米国の音楽テストの評価観に関する研究 －表現領域の評価に着目して－</p>			
論文審査担当者			
主 査	教 授	三村 真弓	
審査委員	教 授	樋口 聡	
審査委員	教 授	枝川 一也	
審査委員	准教授	伊藤 真	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、20 世紀後半の米国の音楽テストの評価観の変遷を、見えにくい力をいかに捉え測ろうとしてきたのかという観点から明らかにするとともに、その評価観が有する史的意義と現代的意義や表現領域の評価の有する課題を指摘することを目的としている。具体的には、研究者達が個人研究として開発してきた演奏や創作に関する表現課題を課すテストと、全米規模のものとして、音楽教育における創造性育成のための現代音楽プロジェクト The Contemporary Music Project for Creativity in Music Education（以下、CMP）で開発された表現課題を課すテスト、および全米学力調査（音楽）で課された表現課題を課すテストを対象として、研究をおこなっている。</p> <p>本論文は、序章、第Ⅰ部（第1章・第2章）、第Ⅱ部（第3章・第4章）、第Ⅲ部（第5章・第6章）、結章で構成されている。</p> <p>序章では、研究の背景、先行研究の検討、研究の目的が記されている。</p> <p>第Ⅰ部では、20 世紀後半の米国において、研究者達が個人研究として表現領域における音楽の力を客観的に測定するためにどのような試行錯誤をしてきたのかが論じられている。第1章では、器楽演奏の標準テストや因子分析を用いた演奏評定尺度の開発の取り組みを検討している。個人研究としての演奏テスト開発が、1970 年頃を境に、演奏における解釈や音質などの芸術的な質の客観的測定が不可能であるという教育測定的な考え方から、因子分析などの客観的な手順を用いて評価の観点や評価基準をうまく設定することによって、ある程度、信頼性や妥当性のある評価結果が得られるという考え方へと移ってきたことを指摘している。第2章では、7 種類の実験的な音楽的創造性テストの検討によって、アイデアを短時間で流暢にたくさん出すという流暢性に関するスキルがこれらのテストでは重要視されているということを明らかにしている。また、柔軟性というアイデアの質の種類に対する量的評価や、この回答はあまり出ないから何点というように質を量的に処理して評価する試みの存在を指摘している。</p> <p>第Ⅱ部では、大規模な改革を試みるプロジェクトにおける事例として、現代音楽プロジェクトにおける測定・評価に関するシンポジウムを取り上げ、そこでどのようなテストが</p>			

作成されたのかを整理している。その結果、「音楽教育の評価規準」に関するシンポジウムでは、評価方法や具体的なテスト内容を示すところまでは至らなかったことを明らかにしている。そして、CMPでは創造性の育成を掲げている一方で、コンプリヘンシヴ・ミュージシャンシップの評価に関するシンポジウムの結果、実際におこなわれたテストの作曲・編曲の課題のほとんどは、指定された技法等を使って作曲できる、楽譜を作ることができるといったことを目標として掲げる内容になっており、音楽的に優れた作品を作曲できるかどうか、あるいは、独創的な作品を作曲できるかどうかといった作品のよさやおもしろさ等を主観的に評価するようなものではない点を指摘している。

第Ⅲ部では、音楽科における唯一の全米規模の学力調査として、1971年よりおこなわれてきている全米学力調査（音楽）の変遷を概観するとともに、表現領域のテストの評価事例を検討している。その結果、第1回で客観的測定が困難であると考えられてきた声質や音質、表現の面白さや魅力のような芸術的な観点が、第3回では演奏や創作の学力調査の評価の観点として受容されたことを指摘している。また、評価の観点の細分化や、評価基準の作成といった特徴が、第1回と第3回のテストに共通して見られることを明らかにしている。

これらを総括し、結章では、教育学全体の動きを20年以上遅れて追従するかのようになり、1970年以降に米国の音楽テストの評価観が教育測定的な見方から教育評価的な見方へ移り変わってきたことを指摘している。また、創造性テストの音を使って様々なアイデアを試行錯誤し何かを生み出すというプロセス自体を評価するという考え方や、現代音楽プロジェクトのパフォーマンス自体に創造性を見いだすといった考え方の存在に、今日的意義を見いだしている。そして、テストでの測定には限界があるが、テストの過程でみえてくる情報に価値があることも言及している。

本論文は、以下の点において高く評価できる。

第1に、20世紀後半の米国における表現課題を含むテストという、ペーパーテスト等の客観的な試験問題で可視化して測定することが難しい分野における測定に対する試行錯誤の変遷を追うことで、その評価観の変遷自体を明らかにするだけでなく、テストの意義の存在を指摘している点である。このことは、テストや成績評価の是非が議論されている現代において、今後の教育評価実践のための指針をもたらすための基礎研究として評価することができる。

第2に、従来わが国で十分に検討されてきたとは言えない米国の音楽的創造性テストを資料とし、その現代的な価値を新たに見いだしている点である。これらの音楽的創造性テストの、単にクラシック音楽の専門家的見識から子ども達の外にある既存の価値を学習させ評価するという方向ではなく、音を使って様々なアイデアを試行錯誤し何かを生み出すというプロセス自体の中の拡散性や独創性を通教科的に評価するという、音楽そのものの本質的な評価と学校教育における評価をつなぐ評価観を指摘している点に音楽教育学研究の進展が認められる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。